

第三回学内個展 | 博士課程学位申請リサイクル

ATSUSHI YAMAJI - Images & Melodic LiNES

山路 敦司

映像と“線”律

京都市立芸術大学 大学会館ホール | 入場無料

2016年12月15日(木)午後6時開場 / 午後6時30分開演

【演奏】芳村直也 (龍笛・篠笛その他) | 木村ハルヨ (二胡) | 新鍋佑菜 (笙) | 小山豊 (津軽三味線)

白井康浩 (エレクトリック・ギター) | パール・アレキサンダー (ベース) | トーチカ (映像インスタレーション) | 他

【曲目】映画『悲しき天使』より / 映画『正長の土一揆』より / 映画『蜘蛛の糸』より / 映画『青銅の基督』より
/ DIES IRAE / LiNESOFLiGHT

曲目

1. 『悲しき天使』より

江川 菜緒、大堀 綾矢子 (ヴァイオリン)、坪之内 裕太 (ヴィオラ)、鷺見 敏 (チェロ)

2. 『正長の土一揆』 / 『蜘蛛の糸』より

芳村 直也 (籠笛・篠笛その他)、木村 ハルヨ (二胡)、新鍋 佑菜 (笙)

江川 菜緒、大堀 綾矢子 (ヴァイオリン)、坪之内 裕太 (ヴィオラ)、鷺見 敏 (チェロ)、志賀 俊亮 (ピアノ)

3. 『青銅の基督』より

小山 豊 (津軽三味線)、白井 康浩 (エレクトリック・ギター)、パール・アレキサンダー (ベース)

4. DIES IRAE

5. LiNESOFLiGHT

江川 菜緒、大堀 綾矢子 (ヴァイオリン)、坪之内 裕太 (ヴィオラ)、鷺見 敏 (チェロ)、志賀 俊亮 (ピアノ)

トーチカ (映像インスタレーション)

本リサイクルは、博士課程在籍期間中に作曲担当した映画、ミュージック・ビデオおよびアート・アニメーションの作品による音楽を中心に、博士課程における研究テーマである「武満徹のポピュラー音楽に見られる作曲語法 —映画音楽における旋律の分析による実証を中心に—」と関連し、武満の映画音楽におけるポピュラー音楽的な作曲手法～自作引用、即興、他者との協同作業、ポピュラー音楽的な旋律作法など～を自己の作曲に実践的に応用するかたちで再作曲または解体と再構成を行い、映像およびインスタレーションの上映も含めたりサイクル形式の作品個展として発表するものである。

日本の現代音楽作曲家として国際的評価の高い武満の、演奏会用芸術音楽作品以外による娯楽性の高い映画やTVドラマにおける音楽作品に焦点を当て、そこに通底する音楽的特徴について、作曲家からの視点で考察する研究をこれまで行い、その成果を自己の創作活動に置き換えることで、その同義性との関係を確認する目的で企画した。そのような位置づけにおいて、今回発表する作品については、いわゆるアカデミックな「芸術音楽」的なものではなく「実用音楽」としての面がバランス的に強い。音楽が「芸術的」あるいは「非芸術的」か否かについての定義は困難であり、またそれはポピュラー音楽においても同様である。個人的には現代音楽という言葉の定義と実態に疑問を感じており、現代におけるクリエイティヴな表現においてそのカテゴリー区分はもはや意味を成し得ていないと考えている。しかし、多少に関わらず全ての音楽にはエンターテインメント性が備わっているものである。

映画および映像作品に付随する音楽表現には確固たるルールやセオリーが何も存在しないが、いかに音によって映像を演出するかについて、作曲家は何よりもまず優先するべきであると考えている。本リサイクルが主眼とするテーマは、その映像演出のために一貫して検討してきた、「旋律」を主要的な要素として作曲および構成することである。その手法については直感による鼻歌的歌唱であったり、アカデミックなエクリチュール (作曲書法) による音楽的動機 (モチーフ) の操作であったり、またコンピュータ・プログラミングによってアルゴリズム生成されたものであったり、と様々である。それらを音の心理的な「線」としてメロディックにとらえる思考や、構造化するデザイン的な発想は、ジャンルやスタイルに関わらず全て自分自身の中で共通しているものであり、またそれらの中鑑賞者における記憶の残像としての、いわゆる「サビ」のような何かを常に探している、という点において研究テーマと同様に、エンターテインメント性を常に意識した音楽であるとも言える。

今回、演奏者の方々や関係者の方々のご尽力、指導教員や講師の先生方のご指導、また作曲科学生の皆様のご協力によって開催出来ますことを心より深く感謝します。有難うございました。

『悲しき天使』

公開: 2006年 監督: 大森一樹 主演: 高岡早紀
出演: 山本未来、河合美智子、岸部一徳、筒井道隆、
峰岸徹ほか

事件を追いながら、恋人との距離を計る女刑事。忌まわしい過去により恋を捨て、仕事に生きる女。夫の過去の恋愛を引き受け、家庭に生きる人妻。ある殺人事件を巡って交錯する、それぞれ境遇の異なる 30代の女性たちの人生模様を描いたヒューマンドラマ。

映画全体のストーリーは、不幸な境遇により止むを得ず殺人を犯した一人の女性とそれを追う二人の刑事の捜査を主軸に、犯人である女性を匿(かくま)う元恋人と、その妻による隠蔽の駆け引きを通して展開される。映画全体に浸透する、善悪で割り切ることの出来ない遣る瀬ない悲哀を表現するために、それを象徴させる4音(E♭-D-B♭-G)を主要な音楽的動機として展開させ、主要場面に使用することによって映画全体の音楽的な統一感と構造化を図っている。また、旋律の叙情性による印象を際立たせるため、主要場面以外の部分においては、状況観察的な視点として旋律性の希薄な持続音を中心に直線的な上行・下行の音階による音楽的演出を目論んでいる。

なお映画本編のサウンドトラックは、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団によってプラハで録音されたものであり、今回新たにその弦楽四重奏用の編曲を行った。楽曲前半は悲哀の4音の主要動機を主体として旋律的に構成したメイン・テーマであり、本編最後のクライマックスにおいて、逃亡する犯人と刑事の女性同士が逮捕によって初めて出会う場面に付曲している。また楽曲後半の音楽は、捜査の場面において本編ではアルゼンチン・タンゴ調の編曲で使用される。ここでも4音の動機を変形および展開した主題を使用して、その途中で捜査の中で女性刑事のプライベートな心情を吐露する場面に付曲される音楽を、部分的に挿入し構成している。

『正長の土一揆』

公開: 2015年 監督: 秋原北胤 主演: 斎藤洋介
出演: 松田洋治、大浦龍宇一、吉村涼、小倉一郎ほか
室町時代中期を背景に、かつては茶の種類を当てる賭博の「闘茶」に明け暮れ、今は武士の身分を失った茶園主・平次郎が、凶作や飢饉、疫病などに見舞われ貧困に苦しむ農民らを東ね徳政令の発布を要求し、一揆によって時の権力者に立ち向かう姿を描いた時代劇。

『蜘蛛の糸』

公開: 2011年 原作: 芥川龍之介 監督: 秋原正俊
主演: 平幹二郎 出演: 高畑こと美、松田洋治、鳥肌実、
高畑淳子ほか

芥川龍之介の代表作「蜘蛛の糸」に短編小説「アグニの神」「煙草と悪魔」を融合させ、現代に置き換えた新解釈により映画化。

現世で悪事を働き、とりわけ特異な地獄に堕ちた主人公カンダタの、生前に行ってきた悪事の理由が明らかにされていく文芸ファンタジー。

この二つの映画についてはそれぞれジャンルも設定も全く異なるものだが、今回これらを連結させ一つの楽曲として構成した。背景に流れるアンビエント的音響はそれぞれ本編で使用したものであり、ある程度共通した素材をサウンド・コラージュ的に加工し使用しているため、両作品を接続する機能を持たせている。

『正長の土一揆』は、まず映画全体を通して浸透する主人公・平次郎のテーマの提示より始まる。このイメージは、かつての武士であり今は茶園主として農民らを率いて蜂起する英雄的象徴であり、テーマを構成する音楽的動機 (D-C ↑ -A ↓) は本編における他の楽曲において様々に展開する。それに続く音楽は本編のクライマックスである「闘茶」の場面に付曲したものである。闘茶とは中世の時代に流行した茶の味を飲み分けて勝敗を競う賭博的遊戯であり、胴元としての中立的立場のイメージあるいは茶の湯の精神的な象徴としての笙を背景として、闘茶のルーツである中国的象徴としての二胡と日本の象徴の龍笛 (あるいは篠笛) が、相対する関係として即興的に旋法を変容させつつ長い音楽的な勝負の駆け引きを展開する。また西洋楽器群も、同一旋法から複数の旋法の同時並列による混在へと徐々に変容しながら粛々とクライマックスへ向かう。

『青銅の基督』

公開: 2016年 原作: 長與善郎 監督: 秋原北胤
主演: 柄本時生 出演: 吉村涼、松田洋治、マギー司郎ほか
キリシタン迫害による江戸時代初期の長崎を舞台に、神と信仰による人間の精神を描いた映画。若い南蛮鋳物師・萩原裕佐が役人の要請で踏絵用のキリスト像を造るが、余りにも気高さを持つ出来栄であったため異教徒として捕らえられ、悲劇的な結末を迎える。

この映画は、松竹の製作・配給で1955年(昭和30年)に公開され第9回カンヌ国際映画祭に出品された渋谷実監督による同名映画のリメイクであり、映画本編のサウンドトラックは太棹三味線、パロック・ギター、ヴィオラ・ダ・ガンパによるトリオ編成で、義太夫と西洋古楽との対比と融合を主軸に特殊奏法やノイズを多用した即興演奏を主体に構成している。1955年度版の音楽は黛敏郎が担当しており、そのオマージュとして本作では黛が最後のクライマックスにおいて用いた音楽的アイデアを主題として展開させている。

今回の演奏はその音楽自体を更に解体し、オリジナルに似て非なる楽器編成で全くスタイルの異なる演奏家の即興による特性を強調し新たに再構成を行った。それはいわゆる定量的な記譜行為ではなく、演奏家とのリハーサル(ミーティングも含む)による対話と、現場におけるディレクションによって

笙のソロを挟んだ後、『蜘蛛の糸』がオープニング・テーマより始まる。テーマを構成する音楽的動機 (G-D ↑ -F # ↓) についても、本編における他の楽曲において様々に展開するが、その音楽演出についてはライトモチーフ的発想で映画全体の世界観を設計している。極楽浄土の象徴としての笙、蜘蛛の糸の印象としての二胡、人の業の象徴としての龍笛 (あるいは篠笛) によって、地獄・現世・極楽の場面に對し付曲しているが、極楽に向かう上行音階や地獄に墮ちる下行音階という風に、動機展開に加え使用音域や楽器、音響特性の区別によって聴覚的に場面設定を認識するよう目論んでいる。

定着させる方式で、ある種「発注芸術」としての作曲家の在り方の模索でもある。

楽曲自体は本編中の6つの場面に付曲されたものを基本的に構成しているが、それらが本番の演奏で如何に展開するのかについてはあえて確定させていない。それはつまり、自己の中にある既成的な構成感覚を捨てては突き放し、更に引き戻すことを往復しながら結果的に本番でそれをも破壊させてしまうスリリングさと寛容さこそが、本来作曲家と演奏家の信頼関係に基づく真の協同作業だと考えるからである。

DIES IRAE

この作品は、今回のプログラムの中においていわゆる「ポピュラー・ソング」に最も近いかたちではあるが、現代音楽およびポピュラー音楽研究との関連に対する整合性による表現のため、あえて上映することにした。楽曲中でヴォーカル・パートとして使用する旋律はグレゴリオ聖歌の《怒りの日》であり、その宗教的および文化的な解釈、またポピュラー音楽的要素とブリコラージュ (Bricolage = 様々な異なる素材を使用してその場で構成する手法) 的な電子音響とを混合させるため、イギリスの映画監督であるデレク・ジャーマンの盟友として『カラヴァッジオ』『ラスト・オブ・イングランド』『BLUE』など多くの映画作品を手掛けた音楽家、サイモン・フィッシャー・ターナーとの協同作業を行うことにより、それを具体化させた。そのブリコラージュとしては、フィールド・レコーディングした東京の街頭でのノイズをコンピュータでアルゴリズム的に加工編集を施したものや、ヒップホップの音楽トラックを録音したカセット・テープにわざと傷を付けて再編集したものなどを音響素材として使用している。

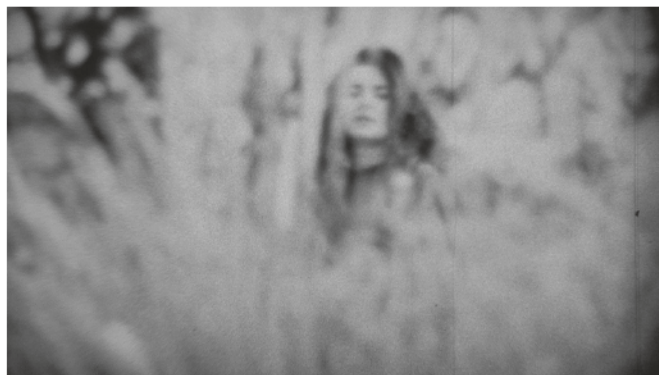
映像についてはヨーロッパで活躍する日本人の映画監督である若桑江織、オランダの俳優であるゴンチャ・カラスによる出演、そしてトルコ人のデザイナーであるフィリス・アクチャカ

LiNESOFLiGHT

映像を担当するトーチカとは、これまでにアート・アニメーション作品からエンタテインメント性の高い商業作品まで、振り幅の広いシチュエーションの中で継続的に協同作業を行って来た。最近作としては「東アジア文化都市 2017 京都」のプロモーション映像が現在一般公開されているが、今回の映像は、使用されなくなったフィルムカメラを再利用し独自に開発した3台の映写機に35mmフィルム写真をループ状につなげ、その反復的な映像を投影するインスタレーションと、音楽アンサンブルの演奏による初の協同パフォーマンスとなる。

今回、両者の共通のツールとして「Processing」と呼ばれるアートとビジュアル・デザインのためのプログラミング言語による統合開発環境を使用しながら、3台の映写機の同期と旋律や楽譜の生成を行なっている。さらにその結果をマニュアル操作することによってカスタマイズし、「映像による演奏」あるいは「音楽による描画」のように相互的な関係を目論んでいる。

音楽については、トーチカの映像表現手法である「PiKA PiKA = 光のラクガキ」による「線」の発想を共通コンセプトとしつつ、それを音楽に応用することで、自分自身の研究テーマである「旋律における音高遷移」(音の高さの移り変わり)について検討する、言わば「音のラクガキ」による実証を試みている。具体的には「点」や「線」としての音高の周波数と発音のタイミングをコンピュータで計算しながら、その生成結果



ルによるファッション・デザインによってオランダで撮影された。これはいわゆる「ファッション・フィルム」におけるミュージック・ビデオ的な表現アプローチによって演出されているものである。この「ファッション・フィルム」と呼ばれる映像ジャンルは、単なる服飾のための広報やカタログによる広告表現を超えた実験的で自由な映像表現の場として、現在欧米で大きく注目されているものである。この映像におけるファッション・デザインの位置付けも、あくまで映像と音楽のコンセプトに基づきそれらを演出させる要素として機能させている。



については各演奏者にとって簡便でフレキシブルな楽譜(プロポーショナル・ノーターション)に変換しその描画を行なっている。各々の演奏者は、個性や解釈によってその「点」や「線」についてある程度自由かつダイナミックになぞりながら演奏する。また映像と音楽の同期については、指揮者の指示と映写機の手操作による不確定で直感的な双方向性によって即興的に調整しながら進行する。



芳村 直也 (龍笛・篠笛その他)

大阪府出身。地方楽師の家に生まれ育ち、幼い頃から神社での祭典奏楽と神楽に慣れ親しむ中で龍笛奏者となる。ジャズ、ポップスにも深い探究心を持ち、伝統雅楽、浪速神楽、西洋クラシック、童謡、ポップスまで様々なジャンルの楽曲を龍笛で演奏するスタイルは伝統音楽や雅楽の初心者にも親しみやすく、その魅力を余すことなく平易に伝える役割を果たすことの出来る存在である。現代雅楽ユニット・天地雅楽に結成初期から参加し、様々なメディアに登場する一方、日本各所ならびにフランスでの演奏を数多く経験。



木村 ハルヨ (二胡)

神戸生まれ。本場中国で学んだ確かな技術を礎に、そのアーティストィックな感性を活かした自由な活動は”もはや木村ハルヨという新ジャンル”と評され、”二胡界のDIVA 歌姫”とも呼ばれている。二胡古典曲のリサイタルを成功させる一方で、ロックバンドや朗読ユニットの中心メンバーとしても活躍。年間150ステージを越える演奏活動を日本全国、世界各地で行い、今もっとも革新的な日本人プロ二胡奏者として多方面より大きな注目を集めている。

<http://www.kimuraharuyo.com/>



新鍋 佑菜 (笙)

大阪府在住。大学在学時より神社で巫女として奉仕、卒業後ご縁があり常勤巫女として奉職した際にその音色に惹かれ笙の奏楽を始める。浪速神楽の神楽巫女、祭典奏楽の伶人として奉仕を続けるなか、より神道の知識を深めるため神職免許も取得した。現在大阪府下の神社を中心に巫女・伶人・神職(見習い)として祭典奉仕をする傍ら、神社の文化や雅楽の魅力をより多くの人に知ってもらおうきっかけとなればという想いで神楽舞の奉納や笙での演奏活動に参加している。



小山 豊 (津軽三味線)

日本最大流派の1つである津軽三味線小山流の三代目として、国内・海外で演奏活動を行う。2001、2002年(財)日本民謡協会津軽三味線コンクールで優秀賞を連続受賞。2011年ニューヨーク・カーネギーホール主催コンサート、2013年セルバンティーノ国際芸術祭(メキシコ)に招聘、2014年には中米ツアーを成功させる。ソロアルバム[OYAMAYUTAKA1]をリリースする他、レコーディングやテレビ出演、指導などその活動の幅は広く多方面のジャンルにおいて活躍中である。



臼井 康浩 (エレクトリック・ギター)

名古屋を拠点に年間100本前後のライブを国内外で行う。これまで500人を越える海外アーティストとの共演があり世界中に幅広くネットワークを持っている。ノイズ、音響、身体表現、舞踏、コンテンポラリーダンス、映像作家、書家、朗読、無声映画などと超ジャンルの活動をする異色インプロヴァイザー。インプロ思考法という即興演奏に対する独自のアプローチ法も発信している。<http://www.usui-yasuhiro.com>



パール・アレキサンダー (ベース)

米国アイオワ州育ち。ミシガン大学にてダイアナ・ガネット氏に師事。作曲家ウィリアム・ボルコム(オーケストラ録音(グラミー賞受賞アルバム))に参加。2006年より活動拠点を日本に移し、即興音楽を中心に活躍中。2013年スイス、モントルー・ジャズ・フェスティバルに登場。2015年「メモリーズ・オブ・プリミティブ・マン/オノ セイゲン and パール・アレキサンダー」をソニー・ミュージックよりリリース。



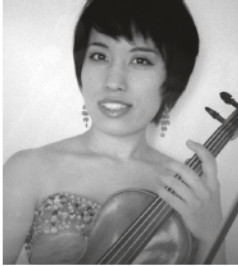
トーチカ TOCHKA (映像インスタレーション)

ナガタケシとモノノカヅエによるアートデュオ。主な作品にペンライトで空中に描くアニメーション作品「PiKaPiKa」シリーズ。制作においては「実験的精神」を掲げ、試行錯誤の中から、ハッピーアクシデント(偶発的な幸運な出来事)を誘う。受賞歴/2016年「TRACK」オランダ国際アニメーション映画祭 ノンナラティブ部門 グランプリ/2015年「TRACK」キプロス国際アニメーション映画祭 グランプリ/2006年「PIKA PIKA」文化庁メディア芸術祭アニメーション部門 優秀賞



江川 菜緒 (1st ヴァイオリン)

和歌山市出身。6歳よりヴァイオリンを始める。ロームミュージックファンデーション主催 京都・国際音楽学生フェスティバル 2015、小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XIII、セイジ・オザワ松本フェスティバル「青少年のためのオペラ」、「子どものための音楽会」に参加。第3回宗次ホール弦楽四重奏コンクール第1位。これまでにヴァイオリンを宮崎彰美、東儀幸、澤和樹、曾我部千恵子、豊嶋泰嗣の各氏に、ヴィオラを山本由美子氏に師事。平成 27 年度青山財団奨学生。京都市立芸術大学を経て、現在、同大学大学院音楽研究科修士課程に在籍中。



大堀 梨矢子 (2nd ヴァイオリン)

4歳よりヴァイオリンをはじめ。京都市立京都堀川音楽高校を卒業。現在、京都市立芸術大学4回生。塩澤まり子、石井志都子、木村和代、梅原ひまり、中島慎子の各氏に師事。第30回ジュニアクラシック音楽コンクール大学生の部第1位。



坪之内 裕太 (ヴィオラ)

4歳からヴァイオリンを始める。2002年熊楠の里音楽コンクール第1位。2009年に明石ジュニアオーケストラのコンサートマスターを勤める。このオーケストラの経験により、ヴィオラの音色に魅せられヴィオラを始める。2014年に榎本大進プロデュース「ル・ポン国際音楽祭 2014」のプレコンサートにヴィオラで出演。バイオリンを菊池佳奈子、ヴィオラを杉山雄一、山本由美子各氏に師事。三田学園高校卒業。現在京都市立芸術大学ヴィオラ専攻4回生。



鷺見 敏 (チェロ)

草津夏期国際音楽アカデミー、森悠子主宰キャパシティビルディング、La Loingtaine マスタークラス、オーケストラアンサンブルセミナーなどの講習会に参加。タマーシュ・ヴァルガ、森悠子、安紀・ソリエール、ラファエル・ベル氏らの元で研鑽を積む。これまでにチェロを上村昇、林裕、小川剛一郎の各氏に師事。現在、京都市立芸術大学4回生。



志賀 俊亮 (ピアノ)

6歳よりピアノを始める。兵庫県立西宮高等学校音楽科を経て現在京都市立芸術大学音楽学部卒業。2005年第21回ピアノオーディション全国大会 A 部門入賞、入賞者演奏会及びピアノ・フレッシュコンサートに出演。2007年第8回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA アジア大会中学生部門銅賞。2009年第55回朝日推薦演奏会出演。2013年第7回神戸新人音楽賞コンクール優秀賞。2014年、2015年大学主催による第28回、第29回ピアノフェスティバルに出演。2014年、2015年いしかわミュージックアカデミーに参加。江口文子、ピオトル・パレチニ、チュンモ・カン、ソジュン・シン各氏のマスタークラスを受講。2015年第25回日本クラシック音楽コンクール第4位。2016年京都市立芸術大学音楽学部第45回卒業演奏会に出演。第28回宝塚ベガ音楽コンクールピアノ部門入選。兵庫県立美術館主催「美術館の調べ」においてリサイタルを開催。現在京都市立芸術大学音楽研究科修士課程1回生。砂原悟氏に師事。

若桑 江織 (映像)



山路 敦司 (作曲)

クラシック、現代音楽の作曲家として活動する傍ら、映像音楽からポピュラー音楽まで幅広く手掛ける。特にコンピュータ音楽やノイズ音楽において多くの海外の音楽祭で作品が発表され高く評価されている。Cartier や Panasonic Latin America 等の海外向け広告音楽の他、アート・デュオのトーチカとの協同による一連のアニメーション作品は上海万国博覧会や世界中の映画祭で入選し上映されている。東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了。スタンフォード大学 Center for Computer Research in Music and Acoustics (CCRMA) 客員研究員、国際情報科学芸術アカデミー (IAMAS) を経て、現在は大阪電気通信大学総合情報学部教授を務める。映画『悲しき天使』（監督:大森一樹）で第2回おおさかシネマフェスティバル音楽賞受賞。その他、長年に渡りゲーム音楽を多数手掛け、ニューメディアとしてのビデオゲームにおけるサウンド表現の可能性を研究しており、芸術とエンタテインメントの領域を横断する活動は多岐にわたる。

The 15th & 16th Asian Composers' League / Digital Arts Week 2002 "Beyond Noise" / The 3rd North Carolina Computer Music Festival / The 11th International Electroacoustic Music Festival "Primavera en La Habana" / The 2007 Sonorities Festival of Contemporary Music / 4th Vienna Modern Masters Orchestral Recording Award / 1st PUY of Electroacoustic Music (Occasional Electroacoustic Music), The 21st Bourges, International Electroacoustic Music Competition / Valentino Bucchi Award 1993 International Composition Competition / 第 61 回日本音楽コンクール作曲部門 (オーケストラ作品) / 第 20 回文化庁舞台芸術作品創作奨励賞など、入選および上演多数。 <http://sushilab.jp>